

## 幼児たちから学ぶ

### かずかずのこと ⑦

——水色のノートから——

丸山ふみ

#### 保育室の床の上から

秋のある日、園外保育に出かけた四歳児の組の床に散乱している小さな紙屑を事務員といっしょに掃いていた時、幼児の髪の毛がまじっていることに気付いたことがありました。

その時、「先生、いつも夏前からこの頃には子ども等ってやるのですね」と笑って箒で集めているのは脱髪でなく、明らかに切ったと思われる髪の毛でありました。

幼い声が聞えてきたので門のところへ出迎えに出て、「お帰りなさい」「何を見つけてきたの」と幼児達に声をかけながらも、ついつい、幼児の頭に私の眼はいってしまいました。近付いてきた担任は、私の視線に気付いて、

「先生、すみません。一寸の間に戻ってしまいました」

と恐縮して通りすぎていく後姿をみながら、近頃は五歳児の部屋の前を通りすぎる時、時には足音をしのぼせる程静まりかえってしまっているのに反して、四歳児の楽しい保育室のなかで、何があったのかと今更のように幼児の活動へ目を向けるきっかけにもなったのです。

幼児が、自分の髪の毛を切るという行為が今まで製作活動の道具をだけしか見ていなかった「はさみ」について幼児がどのように興味をもって、生活の道具として使いこなしていくかということを残しておきたいとまとめることにしました。

四歳児で入園したM君が、だんだん「はさみ」を使うことになれていく過程で残っていく作品を担任からいただいたり、時には保育室へ拾いにいたりして集め一年間、スクラップ・ブックに貼っただけのものでしたが、そのことで学んだのは、「はさみ」を使うことで製作活動として新しい経験を広げることよりも、失敗しなさいという緊張感に立たされている幼児の真剣な表情に何と今まで無神経であったかという反省でした。

## 幼児の生活での「はさみ」

幼児達が作ることに同じ位、こわしてしまふことが好きで、その興味が時には保育の流れをさまたげてしまふこともあります。空き箱を踏みつけたり、積み木で作った家をこわしたり、時には数人のグループで懸命で作っていたのに、何かのキッカケで、今度は水でザァザァ流してしまっている時、創り出している時と同じように生き生きしている幼児達の姿に出合います。

「はさみ」が、創り出すことに使われる前に幼児達は大人の眼からみれば、こわしてしまふことに使っている場面が多くあります。

ところが、こわしたり、破ったり、切ったりすることが幼児達が創り出していくための一つの大切な経験になると多くの実践記録で学んでも、ギザギザの頭をして帰っていく幼児を幼稚園から送り出すには少々勇気がいりました。

その日は、連絡ノートへ担任はいきとどかなかったと自分を責めて母親へお詫びの言葉を記したのですが、私は幼児の側に立って考えた時、幼児の試したことの意味を探ろうとし

て、努力して四歳児の仲間に入りました。その期間に、「はさみ」について百科事典の頁をめくって細かい文字を追っている間に思わず笑い出してしまいました。

西洋の王様の墓を掘り出した時、棺の中に入っていた古い「はさみ」から「はさみ」の歴史が説明されていたのですが、その使用目的の推察が、王様の髪を刈るためのものであっただろうという数行でした。

四歳児が、園の生活のリズムにすっかり安定して、行動範囲が拡がってさまざまなことを試そうとしている時期に、幼児たちが自分の生活に幼児なりに必然性をもつことを保障してあげるといふことのむつかしさを改めて感じた「はさみ」の存在でした。

M君が「はさみ」で切るという活動を経験の順序として貼りならべたことと、M君の興味や満足といった感情とは決して重なり次第に発達しているとはいいきれず、ましてギザギザと自分の髪を毛を切っているK子の心の中で考えと保育の場で長い間生活していても、わからないことが多くて恥ずかしく思っています。

(松阪市立松江幼稚園)